

氏名(本籍)	高松敬吉(青森県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第420号
学位授与年月日	昭和62年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	巫俗と他界観に関する民族学的研究—下北半島の民間信仰を中心に—
主査	筑波大学教授 文学博士 北見俊夫
副査	筑波大学教授 文学博士 宮田登
副査	筑波大学教授 芳賀登
副査	筑波大学助教授 牛島巖
副査	筑波大学助教授 哲学博士 荒木美智雄

論文の要旨

本論文は、わが国の民間巫俗（霊界と交信の媒介をつかさどる霊的職能者＝シャーマンをめぐる民俗）の宝庫とされる青森県下北地方を20余年にわたり実態調査を行って得た精細な資料に基づき、他界観・靈魂観を解明した論文であり、400字詰原稿用紙1,136枚から成る。

内容構成は、三部に分かれる本篇を中心に、序篇と終篇の計5篇に組まれている。

序篇では、現代社会における巫俗研究の意義を述べ、また研究史を綿密にたどりながら問題点を探り、本論文の課題設定と研究法とを明示している。

本篇の第一部では、まずイタコの「商売」（巫業）を①「神ごと」（神占いによる啓示。「神おろし」、「神遊ばせ」ともいう）と、②「仏ごと」（「仏おろし」、「仏の口寄せ」ともいう）に大別しており、同じく下北地方でも西通り地域では、イタコの本業ともいうべき「口寄せ」巫業より「神遊ばせ」が盛行している実態を通して、本邦北部のシャマニズムの特色を解明した。すなわち、「神遊ばせ」は、村落の旧家に祀られるオシラ神信仰と密着しており、内容は「村占い」と「家占い」に大別されている。前者では村落レベルでの災厄予知、農作物の豊凶判断が中心であることを重視している。なお、下北地方一般に、「仏おろし」の経文は内容上3つの型に分類できること、そしてイタコの職能は民間療法も重要な領域であり、その実態が克明に記述・分析されている。その呪法は師匠が弟子に対し、成巫としての最後の修業の際に口伝されることを述べている。

こうした巫俗の世界は、この地域社会の信仰基盤をなす六十歳以上の「ババ（老婆）連中」によ

る組織である「地蔵講中」、すなわち「念仏講中」により支えられ、自主的に運営されており、その生活構造が明らかにされている。

第二部では、「恐山信仰と他界観」と題して5つに章立てし、下北地方における地蔵信仰の様態究明から取り組み、村落社会での葬送儀礼と恐山信仰を中心に考察している。

この地域での地蔵信仰が霊山としての恐山信仰と深くかかわっていること、そして「恐山マイリ」の習俗は農作物の豊穰予祝儀礼としての「春マイリ」と豊作感謝の「秋マイリ」および死者供養の儀礼に密着した「夏マイリ」の3つの柱から成ると説いている。

すなわち、恐山の山中他界観には、死者儀礼と現世利益の両面が混融している実態を明らかにした。なお、恐山信仰には海上他界観が併存している点についても事例に基づいて述べ、さらに恐山の奥の院とされる釜臥山の「山かけ」の習俗にも言及している。

ついで第三部「死者儀礼と靈魂観」では、第一章で「口止め」の習俗（葬送儀礼の湯灌に際し、それにたずさわる人たちに出す飲食のことで、死者との食い別れの儀礼）について詳述した。第二・三章では、海と川での水難をめぐる問題を扱い、水難者捜索に際し、鶏を用いる習俗を中心に、韓国や中国での事例と比較考察し、その類同性を指摘した。

終篇では、下北地方におけるシャマニズムの世界が、神と仏との二重性をからませながらも、神官・僧侶が全く関与しない土着宗教の固有性が根強く保有されている点を総括的に整理したうえで、本邦シャマニズムの南の宝庫とされる沖縄に視野を投げかけて比較を試みた。その結果、イタコの「商売」とユタ（沖縄における代表的民間巫者）の巫業には類似性を認めることができるが、成巫過程ではいくつかの変差が確認されるとしている。すなわち、イタコが修業を積み重ねる修行型であるのに対し、ユタは巫病のカミダーリ（神がかり的症状）により入巫するなど召命型であること、そして、この召命型は、青森県下をはじめとして東北地方に多くみられるカミサマや、伊勢・志摩地方のミコと呼ばれる巫者と同類型に属することを明らかにしている。

審 査 の 要 旨

本論文の特色は、(1)高松氏自身が下北地方の出身者であり、究極的には郷土人でなければきわめにくい心意伝承の領域に立ち入り、土着のことばで聞き取り、克明に記述した上で分析し、本邦シャマニズム世界における北の宝庫の宗教民俗誌作成を成し得た。(2)このことは、南の宝庫・沖縄の成果が先行し、北がいちじるしく遅れていた学界情況に鑑み、両者の比較研究を可能にしたことを意味し、学界への貢献度は大きい。(3)下北地方における民間信仰の母胎となっている恐山信仰にみられる山中他界観を、いっそう明確に浮彫りし、この信仰儀礼の代表的な担い手集団である「地蔵講中」と密着した関連性を、死者儀礼ともからめて構造的に把握し、その機能を具体的に分類・整理した。

なお、高松氏に今後いっそうの研究進展を期待して望むところは、氏自身が積み上げた宗教民俗資料を、宗教民俗学の上で、さらに深化させることである。そのためには、下北地方の風土と信仰実態の歴史的形成過程の解明がさらにすすめられるべきである。

また、里修験とのかかわりを考慮することや、口承文芸の領域からも資料が摂取されるのではないかとも考えられる。なお、沖縄など南西諸島との比較を継続してよりいっそう充実をはかることが望まれよう。

以上、望蜀の箇処をも述べたが、総体として、本邦シャマニズム研究の成果として学界に寄与するところが大きく、高く評価されるものと判断される。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。